



Title	サテの歴史的変化について : 中世天草版平家物語を中心に
Author(s)	岡崎, 友子
Citation	語文. 2010, 92-93, p. 65-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69138
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

サテの歴史的变化について

——中世天草版平家物語を中心に——

岡 崎 友 子

一 はじめに

現代語のサテ(1)は、いわゆる転換の接続詞として機能している。

(1) (ドラマで、深夜独りで残業)

サテ、そろそろ帰ろうかなあ。

サテについて現代語では浜田(一九九五)等、古代語では荻野(二〇〇〇)・西田(二〇〇一)等の先行研究がある。

ただし、これらの研究でサテは転換の接続詞であるという前提で考察がなされており、それに対し岡崎(二〇〇八、二〇〇九)は中古のサテには副詞と接続詞の両方の働きがあり、歴史的に副詞的な機能を失ったこと、また現代語のサテにも転換以外のさまざまな働きがあることを指摘した。

(2) (副詞的用法)「情なき人なりてゆかば、さて心やすくてし
もえおきたらじをや」など言ふもあり。

(源氏、若紫四巻、二〇四頁)
なお、サテの歴史的变化について岡崎(二〇〇八)では、中古語と現代語の比較からの予測のみである。

そこで、本論では中世以降の資料を調査・分析し、変化の一端を論じていく。⁽³⁾また、特に中世末期の天草版平家物語と原拠本の対照をおこなうことにより、サテが歴史的な流れの中で、どのように変化したのか、その様相を示していきたい。

二 現代語と中古語のサテの用法について

サテの変化を考察する前に、現代・中古語のサテについて確認し、さらに中古語の用法については再考しておきたい。

二・一 現代語のサテについて

現代語のサテは、以下のように分類できる(岡崎二〇〇八、二〇〇九)。

(3) サテ① 添加＋転換A(ソシテと似た働きをするもの)

サテ② 転換B(トコロデと似た働きをするもの)

サテ③ 転換C(デハと似た働きをするもの)

↓サテ③はさらに③質問と③話題・行動

また、接続詞としては機能していない、感動詞の用法がある。

サテ④ 感動詞の用法(他、慣用的なもの)

(サテ①について)

サテ①は、以下のようにソシテと似た働きをするものである。

(4) 「マーフイーの法則」なるものが、かつて流行した。(中略)「別の列に移動すると、元の列の方が早く動き出す」といった「真理」に、大いに肯いた覚えがある。(さて／ソシテ)今、「教員の子は教員になっていることが多い」と聞けば、肯く向きもあるだろう。

(朝日新聞二〇〇八年七月一八日、ソシテを加えた)

サテ①は前件に後件の事柄を添加する場合(同類異項目の添加、森山二〇〇六)に現れるが、岡崎(二〇〇九)で指摘したようにサテ①はソシテと違い、後件に場面・視点の転換も必要とする(なお、近世頃までのサテには、場面・視点等の転換がない添加が見られる。後で考察をおこなう)。

(サテ②について)

サテ②は、以下のようにトコロデと似た働きをするものである。

(5) 世の中はいつの時代でもせちがらいものだ。おっとり構えていると、いつのまにか出し抜かれてしまう。(さて／ト

コロデ／*ソシテ／*デハ)、「人を出し抜く」ことを英語で steal a person's thunder (≡ 人の雷を盗む) という。

(長谷川二〇〇〇より、二三頁、「トコロデ・ソシテ・デハ」を加えた)

「トコロデ」について川越(一九九五)は、「トコロデ」の本質は「話題レベルのシフト」であり、本題を導入する場合に「トコロデ」と「サテ」は置き換えられるとする。

(サテ③について)

サテ③は、以下のようにデハと似た働きをするものである。

(6) (デハ／サテ)、次のニュースです。

サテ③は、例(1)(6)のような次の話題・行動へと移るときに現れる場合や、以下のクイズ・質問形式に現れる(前者をサテ③話題・行動、後者をサテ③質問とする)。

(7) (前略)「水深10センチ・秒速1メートル」の水流が、「水深20センチ・秒速2メートル」になると、(さて／デハ)力は何倍になるでしょうか？

(朝日新聞二〇〇八年九月三日、デハを加えた)

(サテ④について)

サテ④は、感動詞として働くものであり、以下のように疑念・とまどい等を表す場合に用いられる(また、慣用句はサテオキ等)。

(8) これを高く掲げれば、「戦闘のゴールは近い」と示すことができる——。(中略) 目の前のフェインの顔は1メートル

ルほどもあった。「(さて／*デハ／*トコロデ／*ソシテ、
どうしようか」。

(朝日新聞二〇〇八年八月一四日、デハ・トコロデ・ソシ
テを加えた)

二・二 中古語の「サテ」について

中古のサテは、指示副詞サが指示する前件の事態が後件の事態を修飾・限定する副詞的用法(Ⅰ)と、前件の事態を受け後件の事態と関係づける接続詞的用法(Ⅱ)に分類できる(そして(Ⅱ)はⅡ―A条件、Ⅱ―B列叙・転換、さらに中古にはないⅡ―C行動に分類される)。なお、中古には「サテモ・サテサテ」と用いられる場合に見られる、前件と後件の事態をまったく関係づけない感動詞的用法(Ⅲ)がある(サテは中世以降にこの用法を獲得するため、本論の分類に入れる)(以上、岡崎二〇〇八)。

ところで(Ⅱ―B)列叙・転換には、現代語のサテ①②、さらに現代語のサテには用法の無い(視点・場面の転換のない)添加や並列、また(Ⅱ―C)行動にはサテ③話題・行動と③質問が含まれている。

そこで本論では、サテの歴史的変化を詳細に見るために、岡崎(二〇〇八)の(Ⅱ)を以下に修正する。

- (Ⅱ―A) 条件 (Ⅱ―B) 添加
- (Ⅱ―C) 転換を含む添加 (Ⅱ―D) 転換 α
- (Ⅱ―E) 転換 β

(Ⅱ―E―1) 質問 (Ⅱ―E―2) 話題・行動

ただし、結論を先取りすることになるが、管見では近世前期までは(Ⅱ―E―1)(Ⅱ―E―2)を見いだすことができない。そこで、近世前期までは(Ⅱ―E)として一括して扱う。

この分類において、(Ⅱ―C)は現代語サテ①、(Ⅱ―D)はサテ②へと、それぞれ歴史的につながっていく。(Ⅱ―B)については現代語のサテにはない添加(のみ)の用法であり、詳しくは次節の源氏物語の例で示していく。

二・三 源氏物語のサテについて

源氏物語のサテを表一にまとめる。⁽²⁾

表一

48		I
18	A	II
17	B	
6	C	
18	D	
0	E	
59	計	III
0		
107		
		計

表一に示すように、現代語のサテにはない(Ⅰ)副詞的用法48例、(Ⅱ―A)条件18例、(Ⅱ―B)添加17例が見いだせる。また、岡崎(二〇〇八)でも指摘したように、この期のサテには(Ⅱ―E)転換 β と(Ⅲ)感動詞的用法は見いだせない。

ところで(Ⅱ―B)は、先にも述べたように、現代語ではサテ

と置き換えられないソシテと近い働き（場面・視点の転換がない添加）をするもの（9）、さらに現代語で添加として働く「ソレデ・ソレカラ」等と近い働きをするものが見られる（ソレデ（10）、ソレカラ（11））。

（9）宮、大将などにやゆるしてまし、さてもて離れ、いざなひ取りてば、思ひも絶えなんや（兵部卿宮か右大将などにもいっそのこと許してしまおうか、そして自分とは縁が切れて、その人たちに迎え取られるというのだったら、あきらめもつこうというもの）（常夏三巻、一三四頁）

（10）女にていとらうたげになん」と語る。「さていづこにぞ。人にさとは知らせで我に得させよ（女の子でとても可愛らしゅうございました）」「それで、どこにいるの？」

（11）夕顔一巻、一八六頁）さらにかかる消息あるべきことにもあらずとのたまはせ放ちければ、かひなくてなん嘆きはべりける。さて、また、常陸になりて下りはべりにけるが（まるでお取りあげにもなりませんでしたので、その女はお知らせ申したかいもなかったと嘆いていたのでございました。それからまた、その夫が常陸守になり自分も下向しておりまして）（宿木五巻、四六〇頁）

なお、この（Ⅱ―B）は中古以降、本論の調査範囲である近世まで例は見いだせる。

三 中世以降のサテの用法について

中世におけるサテについて、覚一本平家物語・天草版平家物語の調査・分析と、さらに天草版平家物語と原拠本の対照を中心に、その変化を指摘していく（以降、「覚一本平家」「天草版平家」とする）。

三・一 覚一本平家のサテについて

覚一本平家の調査結果を表二にまとめる。

表二

I		II	III
8			
2	A		
46	B		
8	C		
5	D		
0	E		
61	計		
0			
69			計

表二から分かるように（Ⅰ）副詞的用法と（Ⅱ―A）条件が激減する。また（Ⅱ―E）（Ⅲ）については、中古と同じく例は見いだせない。

なお（Ⅰ）については、

（12）少将「いたうな歎ひそ。宰相さておはすれば、命ばかりはさり共こいけ給はむずらむ」となぐさめ給へ共、（ひどく嘆いてくれるな。宰相がそうにおられるから、命だ

けはいくらなんでももらい受けてくださるだろう)

(巻第一少将乞請、一六五頁)
をはじめ、「さて渡(わたら)せ給・さて御渡候ゆへ」(上一五九・上一二六一・上一二六五頁、下三八六頁)、「さておはすべかりし人」(上三三八頁)、「さてそこにあれば」(上二五一頁)と存在や移動を表す動詞に偏ることからも次第に衰退していることが伺える(もう1例は「さておぼしめしかへさせ給」(下二五〇頁))。

三・二 天草版平家のサテ、さらに原拠本との対照において

天草版平家の調査結果を表三にまとめる。

表三

I		II	III
12			
2	A		
36	B		
14	C		
17	D		
0	E		
69	計		
8			
89			計

天草版平家における(Ⅰ)副詞的用法と(Ⅱ—A)条件の例数は、中世前期の覚一本平家と比べると、あまり変化は見られないが、(Ⅰ)副詞的用法12例中9例が、次の(13)のような「サテアラウズルコト(アラウコト)デナケレバ」という慣用的な表現であることから、この時期には(Ⅰ)は衰退していたのではないかと考えられる。

(13) 海上も次第に暗うなれば、名残わ惜しけれども、さてあらうずることでもなければ (巻第四十四、三一九頁)

なお、(Ⅱ—E)については天草版平家においても見いだせない。

(天草版平家と原拠本の対照)

次に天草版平家のサテと、原拠本の対応する箇所を対照させた結果について述べていく。なお、両者の関係は次の①から③にまとめることができる(以降、例では天草版平家は「天」、覚一本平家は「覚」、百二十句本平家物語は「百」と示す)。

①天草版平家サテ、原拠本の該当箇所もサテ

(14) A (天) 若君姫君も筆を染めて、さてを返事わ何と書かうぞと仰せらるれば (巻第四十、二九〇頁)

B (百) 若君姫君も筆ヲ染テ・サテ御返事ハイカニ書ヘキヤラント申玉ヘハ (巻第十、五七〇頁)

②天草版平家サテ、原拠本の該当箇所はサテ以外

(15) A (天) ひとえに後生を願うたと、申す。さて春も過ぎ、夏もたけて、 (巻第二十一、一〇三頁)

B (覚) ひとへに後世をぞねがひける。かくて春すぎ夏闌ぬ。 (巻第一一、一〇四頁)

③天草版平家サテ、原拠本には該当箇所なし

(16) A (天) さらば人参れと言うて、小松殿え帰られた。さて盛国を呼うで重盛こそ天下の大事を聞きいだいたれ (巻第一第六、四九頁)

B (寛) さらば人まいれ」とて、小松殿へぞ帰られける。

主馬判官盛国をめして、「重盛こそ天下の大事を別して聞出したれ。」 (巻第二烽火之沙汰、一七八頁)

天草版平家のサテと、原拠本の対応する箇所を対照させた結果を、表四にまとめる。

表四

① 25	② 23	③ 41
カニ (ヤ) 3・サテイカニ1・ソモ1・抑1・サテンモ1	(内訳) サル程ニ6・サテモ6・カクテ4・イ	

※原拠本においては「扱・去テ」はサテ、「如何」はイカニ、「去程ニ」はサルホドニ、「此クテ」はカクテとした。表中の抑はソモソモと考えられるが、そのまま記した。

次に①から③について、分析をしていく。

① (天草版平家サテ、原拠本の該当箇所もサテ) について

用法としては (I) 副詞的用法5例、(II-A) 条件2例、(II-B) 添加15例、(II-C) 転換を含む添加1例、(II-D) 転換α2例であった。

なお (II-A) 条件は2例とも、この① (原拠本と天草版平家と同じ) であることから、(I) 副詞的用法と同じくこの期には衰退していたことが予想される。

② (天草版平家サテ、原拠本の該当箇所はサテ以外) について
用法としては (I) 副詞的用法6例、(II-B) 添加5例、(II-C) 転換を含む添加5例、(II-D) 転換α3例、(III) 感動詞

的用法4例であった。

副詞的用法である (I) 6例はすべて、(原拠本) サテ (シ) モ↓ (天) サテであり、また6例ともサテアラウズルコトデナケレバであることから、やはりこの時期には (I) は衰退しているものと考えられる。

また原拠本イカニ↓天草サテである (17) は (III) 感動詞的用法であり、この時期にはサテは (III) を獲得していたことが伺える。ただし、意味は現代語とはやや相違しており、これについては次節で詳しく述べる。

(17) A (天) あれわきて仏御前と存ずるが

(巻第二第一、一〇四頁)

B (寛) あれはいかに、仏御前と見たてまつるは。

(巻第一祇王、一〇五頁)

なお原拠本と天草版平家の対照において「(天) さて成親卿わ少しくつるぐこともあらうかと」(巻第一第八、六〇頁) と「(寛) さる程に、新大納言はすこしくつるぐ事もやと」(巻第二大納言死去、一八七頁) のような (原拠本) サル程ニ↓ (天) サテ、(原拠本) カクテ↓ (天) サテ (例15) がまとまって見られた。これについては、接続語「サル程ニ・カクテ」の変化とも関わっていると考えられ、今後の課題としておきたい。

③ (天草版平家サテ、原拠本には該当箇所なし) について
用法としては (I) 副詞的用法1例、(II-B) 添加16例、(II-C) 転換を含む添加8例、(II-D) 転換α12例、(III) 感動詞

的用法4例であった(Ⅰ)の1例は「さてあらうずることな
ければ」(巻第一第十一、七九頁)である。

③のサテが現れる箇所は、右馬の允・喜一検校の会話部分、ま
た原拠本と天草版平家の文脈はまったく変わらないが、サテのみ
が挿入されたもの、そして原拠本の内容が大幅に省略された部分
にサテが使われたものの三パターンである。

このように現代語にはない(Ⅱ―B)添加(及び(Ⅱ―C)
(Ⅱ―D)(Ⅲ)が、右馬の允・喜一検校の会話部分や、そもそ
も無かった部分に挿入されていることから、未だ口頭語でも活発
に用いられていたのではないかと予想される。

(18) 右馬、さてついにわ兄弟のを仲なんとなつたぞ？

(巻第四第二十五、三七九頁)

三・三 近松浄瑠璃におけるサテについて

近世前期の資料である近松浄瑠璃(世話浄瑠璃)の調査結果を
表五にまとめる。表五に示すように(Ⅰ)副詞的用法と(Ⅱ―
A)条件は見いだせなくなる。また(Ⅱ―E)の確実な例は未だ
見いだせない。

(19) 請出すことはさておき思出しも出すにこそ。

(心中天の網島、三七〇頁)

(20) どなたでござると笠をのぞいてヤア伊左衛門様か。なんと
喜左。是は夢か七つか。さてお久しや懐しや。

(夕霧阿波鳴渡、一九三頁)

(21) たむくろの親仁殿疑ひの念なきやうに誓紙書かすが合點か。
何がさて千枚でも仕らう。

(心中天の網島、三七二頁)

表五

0		I
0	A	II
6	B	
1	C	
7	D	
0	E	
14	計	III
13		
27		計

表五に示すように、この期のサテは(Ⅲ)感動詞の用法が多く
なる。なお、現代語サテは感動詞的用法において、疑念・とまど
い等の感情を表す場合に用いられるが、近世前期では喜び(20)
や何ガサテ(21)という定型句で「もちろんだ・言うまでもな
い」という意味で用いられているものが見られる(また、現代語
で見いだせる慣用句サテオキ(19)も見いだせるようになる)。
このように中世に発生した(Ⅲ)感動詞的用法は、近世において
様々に用いられ、現代語に至るまでに、何らかの変化があったこ
とが予測される。

なお(Ⅱ―B)添加については、以下のように近世に入っても
用いられている。

(22) 染めた模様を花かとして肩に止ればおのづから。紋に揚羽の
超泉寺。さて善導寺栗東寺。天満の札所残なく。そなたに
廻る夕立の雲の羽衣。

(曾根崎心中、二〇頁)

三・四 浮世風呂におけるサテについて

最後に、近世後期の江戸語の資料となるが、浮世風呂のサテについて述べておきたい。

そこで浮世風呂のサテを、以下表六にまとめる。

次の(23)に示すように、やや現代語と用法とは相違するものの、先の近松と同様に(Ⅲ)感動詞的用法が目立って見いだせる(23) めく「頭か走つて手が踊る にか「これから拍子でやつてくりよ めく「ヲ、さてそこらは合点だ。足の三陰足もとから
(二〇六頁)

表六

I		II		III	
0	A	0	E-1	20	計
3	B	3	E-2	30	
3	C	3	計		
3	D	0			
0	E-1	1			
1	E-2	10			
10	計				
20					
30					

また、現代語で慣用的に見いだせるハテサテ(24)も、まともって見いだせるようになる(全部で8例)。

(24) イヤ何のかのと取紛れて甚も出しませぬて「ム、夫はわるい。ハテさて夫は氣の毒千万。(六五頁)

さらに、浮世風呂には、以下(25)のように、次の行動に移る際に見られるサテ(Ⅱ―E―2)ではないかと考えられる例が見いだせる。

(25) 八百屋さん。おまへ実性か。テモさても直にならんしたナア。サテト しばらく イヤ、待よ。直にならんしたは能が、江戸子の声色つかふたばかりに、高札で落とした。
(二八二頁)

ただし、これについては(Ⅲ)感動詞的な用法であるとも判断される。

このことから、サテの(Ⅱ―E)の用法の発生には、(Ⅲ)感動詞的用法が関わっているのではないかと考えられる。これについては、引き続き調査・分析をおこなっていく。

四 おわりに

以上、サテが中世の間に(Ⅰ)副詞的用法と(Ⅱ―A)条件を失い、(Ⅲ)感動詞的用法を獲得したことを示した。

紙幅の関係から、近世以降の資料にはあまり触れられず、(Ⅱ―B)添加の衰退、また(Ⅱ―E)の発生・発達については詳しく述べられなかった。別稿で論じることとしたい。

注

- (1) 本論では、議論を単純化するためサテのみを調査対象とする。そのためサテモ・サテシモ・サテサテ等は対象外となる。
- (2) 源氏物語の分析に関しては、岡崎(二〇〇八)の分類を一部修正した。
- (3) 覚一本平家の例は、岩波古典文学大系の頁数のみ記す。
- (4) 対照するにあたり、清瀬(一九八二)を参照した。なお天草版

平家物語からの対照であるため「原拠本の該当箇所がサテ、天草版平家はサテ以外」は観察できていない。

(5) 次の例について(II-E)とも解釈できるが、本論では「いや酒は飲んできた。ところで、話すことがある」と考え、(II-D)として扱う。

のさばり上ればそれ煙草盆お盛と。ありべかゝりに立騒ぐ。
イヤ酒はおきや飲んで来た。さて話すことが有る。これの初
が一客平野屋の徳兵衛めが。身が落した印判拾ひ。二貫目の
贋手形で騙らうとしたれども
(曾根崎心中、二九頁)

調査資料

『源氏物語一』六 小学館新編日本古典文学全集(源氏物語の用例には、小学館新編日本文学全集の巻数を記した)、『平家物語上下』岩波日本古典文学大系、『百二十句本平家物語』斯道文庫古典叢刊2・汲古書院、『平家物語竹柏園本』天理大学出版部・八木書店、江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院、『近松浄瑠璃集上』『浮世風呂』岩波日本古典文学大系

参考文献

荻野千砂子(二〇〇〇)「接続詞「サテ」に関する一考察」『純真紀要』四一、八九—九八頁、純真女子短期大学
川越菜穂子(一九九五)「ところで、話はかわるけど」『Topic shift markerについて』『複文の研究(下)』仁田義雄編、くろしお出版、四六三—四七九頁
清瀬良一(一九八二)『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社
西田隆政(二〇〇一)「源氏物語における指示語「さて」の用法—平安和文での接続詞の用法の展開をめぐって—」『国語語彙史の研究』二一、二二—三九頁

長谷川哲子(二〇〇〇)「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』一〇五、二二—三〇頁

浜田麻里(一九九五)「ソシテとソレデとソレカラ—添加の接続詞—「サテ、デハ、シカシ、トコロデ」転換の接続詞」『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』宮島達夫・仁田義雄編、くろしお出版、五七五—五八三、六〇〇—六〇七頁

森山卓郎(二〇〇六)「添加」「累加」の接続詞の機能—「そして」「それから」などをめぐって—『日本語文法の新地平』益岡隆志他編、くろしお出版、一八七—二〇七頁

岡崎友子(二〇〇八)「指示語「サテ」の歴史的用法と変化について—「源氏物語」を中心に—」『国語語彙史の研究』二七、一八三—二〇二頁

岡崎友子(二〇〇九)「接続詞「サテ」について—現代語の用法とテクスト—」『就実論叢』第三八号、六三—七八頁、就実大学

附記

本論文の一部内容について、第2回文法史研究会(二〇〇九年三月八日、名古屋大学)における発表において、出席者から有益な教授を賜った。記して感謝申し上げる。

また、本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「古代、現代語の指示詞における総合的研究」(課題番号一九五二〇四〇六、代表岡崎友子)によるものである。

(おかざき・ともこ 就実大学准教授)